

究を期待した。——今もこの気もちは変わらない。奄美群島の専門家になってもらいたいのである。しかし、今や君は居ない。残念至極である。

私は君につねに言った。よく関本先生の御指導を受けなさい、と。もとより、川内君は言語学教室の学生である。私がかねにものを言いすぎてはならない。この注意はつねに厳格に守ったつもりである。関本先生からも、いろいろ、川内君のことをお聞きした。

三年生の川内君は、一つの大きい仕事をしてもらったのは、いちばん心にとどまっていることである。それは、西洋諸国の方言研究文献を整理し原稿にしてもらった仕事であった。君は熱心にカードを作った。西洋の前に、中国関係のも、カード化した。

中国関係では、西谷先生の御教導を頂いた。東・西ともに、教育の横山君などが、よく手づかってくれたと思う。西洋関係のカードの整備と原稿化とが、進まないの、ついせつかちにもを申したりしたのは、私の痛恨事である。（伏しておわびする。）そのうちに、他の諸君の協力もあって、川内君の労作は、私どもの「方言研究年報才七巻」（1964年）に載せられた。その文献目録は、識者に注目されている。川内君の功である。

これからというところであった。だのに、研究の峠にさしかかった君が、急にこの世を去った。まことに、夢を見るこちである。どんなかげんだったのかと、いとおしくてならない。と同時に、私ごとき、君に対して、じつに至らなかったと、申しわけなく思うのである。

“川内君。ゆるしてくれたまえ。”と、くりかえし申しないではいられない。

ひとえに、御冥福を祈る。

(4 1.7, 2 3)

川 内 君 を 憶 う

関 本 至

大学の構内を歩いていて、前に行く学生の姿や建物のかげから出て来た学生などを見て「あ、川内君じゃないか」とふとそう思うことが今でもときどきある。そして数瞬のあと「ああ、そうだ、彼はいないのだ」と思い返して、言うに言えない淋しさを感じるのである。

川内且昭君は、日本の西南端、奄美大島のそのまた一番南のはしの与論島に生まれ、大島高校を経て広大文学部に入学したのが、四年半前の昭和三十七年四月であった。人の知るように奄美大島の言葉は日本語の中でもきわめて特異な方言をなしている。川内君は、すでに入学以前より、自分の育ったこれらの島々の言葉の研究に大きい関心をもっていたらしい。それが言語学科専攻

生となり、また藤原教授の主宰される方言研究会に加わるに及んで、それを自分の一生の仕事にしようとの決心を固めたようである。

こうして川内君は方言研究会のメンバーとして方言調査の方法を学び、またその実際をも体験するとともに、言語学科の研究会では自分の生まれ故郷の言語についてユニークな興味ある発表をし、「廣大言語」には「ムヌの話」を毎号書き、また一昨年は「世界の諸言語方言関係研究文献目録」の作成に従事した（これは「方言研究年報」オ七巻（1964）に収められ、それで知ったと言って言語学研究室に外国文献を閲覧に来る人も時折ある）。

もとよりこれらの仕事には未熟な点もあったにせよ、川内君自身の努力と熱心さ、それを助ける学問的環境から推して、将来に大きい期待がかけられると思っていたのである。

昨年は最終学年だということで、今後の方針などについて話し合った。大学院に行きたいが外国語に今少し自信がないので一年のばしてみしり勉強したいということなので、その方針でがんばるようになり、激励したことであった。そして十一月、教室のみんなと水分峠へピクニックに行ったが、丁度行き合わせた男女高校生のグループと一緒になり、川内君もモンキーダンスにほがらかに打ち興じている様子だった。ところがそれから二週間ほどして、義理の元さん同伴で、休養のため故郷へ帰ってくると言いに来た。ゆっくり英気を養って来なさいと言ったのが君に会う最後になるうとは。

従来、川内君は冬の休暇は帰省せず広島で過ごすということだったので、拙宅に遊びに来るよう誘った。一昨年の正月（二年生の時）にも昨年の正月（三年生の時）にも来てくれて、一夕を共にしたのだった。最初の年は口数の少い、ひどく遠慮っぽい青年との印象を受けたが、二年目には「トン普通語」といわれる奄美大島の共通語について、またハブ（毒蛇）についていろいろ面白い話をして行ってくれた。この正月「今年は川内さんが見えなくて淋しいですね。どうしておられるでしょう」と家内も気にしていたのだったが……。

二月十六日、君の計（十五日永眠）を報ずる電報が入りわれわれはただ呆然とした。惜しいことをした。折角、はるばるとあの南のはての島から志をたて、家族の期待と郷党の興望とを荷って勉学に来たのに、そしてあの方言の宝庫である故郷にやがて帰ってその研究に全力を打込もうと意気込んでいたのに、その熱意と努力を以てするならばこの方面で学問の世界に大きい寄与をしてくれたであろうに、君はどうしてそのように死を急いだのか。

目をつむると川内君の姿がまざまざと浮んでくる——歩いて来て、立ちどまり、あのするどい眼でちょっとにらむように目礼し、そして白い歯を見せて話しかける君の姿が目浮ぶ。

川内君、君は今故郷の土の中で永遠の眠りを眠りながら、その魂は時折はこの広島へ、そして

われわれの言語学教室へ遊びに来るのではない。僕にはそう思えてならない。僕たちもまた君のことは終生忘れないであろう。（1966年10月）

「川内君に語る」

大学院教育心理学専攻修士一年

横山正幸

君がこの虚しい地上という舞台を去ってからはやくも八カ月が過ぎた。人間の存在が実に瞬間的な現象にすぎないことを君は俺にたたきつけるがごとく去っていった。今となっては何と言っても、何と考えてもしょうがない。だから俺はいまさら君に説教をしようなどとは思わない。俺は君の死を敬虔な気持で祝福したいとさえ思うのだ。霊魂が不滅なものであるなら君は何次元かの世界でいまこそ真の生命の充実を感じているのではあるまいか。君はもう自由なのだ。何ものもはや君を苦しめ、悩ますことはできないのだ。

それにしても、こうして君に語りかけていると無性にかつての事が思い出されて悲しい。

過去を回想することは残された者の勝手な感傷かもしれない。だが無性に思い出される。

俺たちはよく議論したものであった。似島を一周しながらの議論、一軒、二軒、三軒と空が白むまで屋台を梯子しての議論、方言学に、哲学に、マルクスに、人生論に……

君はどんなに酒がまわってもカードに書くのをやめなかったものだ。俺はあれには感心したものだ。三年の秋、俺たちはかつての方言調査で知った人に招待され、山県郡の大朝町に神楽を見に行った。神楽はいまにも雪の降りだしそうな寒い夜に行なわれた。ウィスキーを飲みながら観覧した農村の素朴なそれは深い感動を俺たちに与えた。

あの日からであった。あの時からであった。君が何かに苦しんでいるのを俺が知ったのは。それから一年余の後、君は自分の死を俺に予言して死んでいった。

俺たちの論じあった多くの問題について何らの答をださないうちに君は逝ってしまった。いやそれが答えであったのかもしれない。君の肉体は確かにこの地上から消えてしまった。しかし川内という一人の青年がかつていたという事実は、少なくとも俺がこうしている限り誰も否定することは出来ないのだ。